



英語会草創期の思い出

高橋 義雄

茅ヶ崎方式英語会の創設から今年で31年、改めて月日の経つ速さに驚いています。1981年の初めごろだったと思いますが、NHKの職場国際放送の先輩で英語会の創始者である松山薫(しげる)さんから「(職場での)英語ニュースを基本に英語習得の方法を体系化して一般市民向け・市民中心のものを世に問うてみたいが一緒にやらないか?」というお誘いがありました。当時の一般的な英語学習法といえば英語の文学作品の和訳が中心で、私など何年も学校で英語を勉強したはずなのにまったく幼稚なものでした。職場とはといえば、とにかくいきなり日本語のニュース原稿を渡されて英語ニュースに仕立てなさい、という乱暴なものでした。それでも時間をかけて毎日見よう見まねの徒弟制度のようなやり方でやみくもに英語を書いたものでした。ですからどうやら一人前になるまで相当時間がかかり、今なら到底許されないものでした。因みに私が最初に手渡されたものは確か「マラソンの英雄アベベが近くまた日本に来る」というもので悪戦苦闘、やっと手動のタイプライターで(当時はワープロもまだありません)書き上げてデスクに渡したものの一向に出来上がってきません。結局これはボツになったことが後でわかりましたが...

英語クラスを始めるにあたって最初松山さんから渡されたものは謄写版、いわゆるガリ版刷りの英語単語集でした。これがのちの茅ヶ崎方式英語の基礎編(今のBook 2)となるものですが、今から考えますとこの語の選択がきわめて優れており、これが方式の基礎を作ったと私は思っています。松山氏は物事を体系的に組み立てることに優れていて今の茅ヶ崎方式学習法の骨格は当時すでに氏の頭の中にはっきりとイメージされていたに違いありません。最初の一般市民向けのクラスは81年の4月、神奈川県茅ヶ崎市の貸教室で会員11人で始めました。なんで茅ヶ崎かという、我々の同志の一人、重岡健司さんが同市に住んでいて今でいうカルチャースクールのものをボランティアとして市民向けに(各方面からの協力を受けて)無料で時折開いていたからです。英語教室はこの茅ヶ崎自由大学の英語部門としてスタートしたのです。まだ仕事をもっていた身として休みの日や泊り明けなどを利用してのものでした。因みに「茅ヶ崎方式英語会」という名称は、亡くなった同志で先輩の石川啓一さんの提案によるものです。

ところで茅ヶ崎方式英語学習法は電子機器の発達とともに発展してきた感があります。先にも述べたように最初はワープロもない、コピーマシンもまだあまり普及していない時代でしたし、カセットテープをかける機器も不十分な時でした。したがって毎週の教材作成には大変時間がかかり苦労した思いがあります。たとえばコピー1枚が40円もしたものですから、同じ元原稿をB4の用紙に5本くらいタイプしてそれをコピーして後で短冊のように裁断するという苦肉の策をしたことを覚えています。会員の皆さんも苦笑しながらも文句も言わずに使ってくれたよい時代でした。また、音声の録音は十分な謝礼が払えないためにネイティブアナウンサーのものはクラスで使う2本のニュースのうちの1本だけで、もう1本は我々自身が粗悪なレコーダーで録音して使うなど、いま考えたらよくもまあ恥ずかしいことをやったものだと思いがすくむ思いです。外国人アナの録音も自宅で手持ちの録音機でするものですから、犬やカラスの鳴き声がいっているなどと雑音の多いものでした。あえて言い訳をさせていただければ、安い会費を維持していくには仕方なかったのです。

しかしだからこそ街の英会話教室以外にめぼしい英語学習教材が少ない中でスタートできた利点もありました。いわゆる日常会話でなく内容のある対話が必要になる日が必ず来る、というのが創始者の信念でした。

そうこうするうち、基礎編だけでは物足りない、あるいはもう少し易しいものを、という会員たちの声が聞かれるようになりました。そこでまず、新たに習得すべき英単語の選択が始まりましたが、これがなかなか大変でした。語の選択は“科学的・客観的”にされなければならないという基本理念からNHK国際放送の英語ニュースで使われる単語をほぼ1年にわたって調べあげました。パソコンはおろかワープロもない時代。まず1語ずつ単語カードに写し取り、1週間ごとにそれをアルファベット順に並べてダブリを取り除く、そしてそれを一覧表にしていく。こうした根気のいる作業を繰り返した末、候補単語として数千を選びました。最後に先輩や同僚たちの意見を聞きながらさらに絞りに絞っていきました。それが現在の「基本4000語」につながっています。

こうして「ないないづくし」の中で、交通費だけの手弁当で頑張る講師たちの情熱と、教室にみなぎる会員たちの熱意に支えられて英語会は徐々に発展していきました。「あるあるづくし」のいま、こうした熱気をとても懐かしく思うときがあります。



Jmail from the UK

Junko Fuse

英国/ロンドン グリニッジ在住

雑記

(1)

2012年は英国にとって大きなイベントが2つある。一つはエリザベス女王の在位60周年(Diamond Jubilee)の祝賀行事。このために通常の国民の祝日に少し変更が出ている。これは昨年のウィリアム王子の結婚に続き2年連続のことであるが、国民が休みを取りやすいようにということか、通常は祝日のない月に週末を含めて休日を取り入れてあるため、有難い。在位50周年(Golden Jubilee)のときは、早起きしてロンドン中心部の沿道に陣取り、女王が乗る馬車を始め、王室メンバーのパレードを見た。今回は王室びいきの友人宅でテレビ観賞としようかと思っている。

もう一つはロンドンオリンピックである。

日本人がオリンピックに傾ける情熱と英国人のそれとは違うように感じられる。この国では夏のオリンピックでも国をあげての盛り上がりといったものがない。冬季五輪に至っては、予想外の英国勢メダル獲得がニュースになって初めて「そういえば今オリンピックやっているんだったね」といった有様である。いやでも開幕が近付いていることを知らされるサッカー(英国ではfootball)のワールドカップに対する盛り上がりとはほど遠い。ウインブルドン(Wimbledon)で毎年行われるテニス選手権の方がよほど関心が高いように思われる。

ここグリニッジ地区(Royal Borough of Greenwich)では、市民の憩いの場となっているグリニッジ・パーク(Greenwich Park)が乗馬関連の競技に使用されるという計画について住民から猛烈な反対の声が上がった。競技そのものだけではなく、多数の訪問者を迎えることによって公園が荒地になってしまう、という危惧からだ。このあたりはいかにも英国らしい。結局計画はそのまま続行されることになったが、どうなるか。この公園は、子午線が通る旧王立天文台を擁し、ロンドン市街が一望できる大変美しい場所である。住民の不安が現実のものとならぬよう心から願っている。

(2)

2月のある日、テレビのトーク番組であるスポーツ選手を見る。久しぶりだ。今やスーパースターの地位にゆるぎがない彼にサインをもらったのは英国に来て間もないある冬のことだった。友人につきあってその選手が所属するチームの練習を見に行っただけのことだ。初めは軽い気持ちで見えていたが、練習が終わるとサインを求めるファンを振り切るように車で出ていくスター選手たちの中で、その選手だけは一人一人の求めに応じていることに気がついた。ちょうど頭角を現し始めたばかりだったが、サッカーファンの間では既に有名だった彼のそのような姿に、いつしか私もバッグの中にあつた手帳とペンを取り出しサインを求めている。サインをしてもらった後お礼を言うと、その選手は私の目をしっかり見て笑顔で‘thank YOU’と言った。見ていると誰にでも同じ態度をとっている。この人はきっといい選手になるだろう、と思った。場所はマンチェスター(Manchester)、チームの名前はマンチェスター・ユナイテッド(Manchester United, 俗称Man U)、そして選手の名前はデビッド・ベッカム(David Beckham)。友人が言った。「一緒に写真撮ろうか？」私は答えた。「写真はいいよ。」・・・今でも悔やまれてならない一言である・・・。

(3)

「笑いなさい。」いきなり見知らぬ老紳士が話しかけてくる。あまりに唐突で驚くが、知らない人にこう言われる経験は1回、2回ではなかった。最初はなぜこのようなことを言われるのかわからず当惑した。しかも1回ではないので非常に気になっていた。

ある日偶然読んだ文章に答えを見つける。英国人は、例え知らない人であっても、すれ違う人とは意図的に目を合わせ、ほほ笑む。「あなたに敵意はありません」という合図を互いに送り合う。だから、目をそらされたり笑顔がなかったりすると不安になる、というものである。そうだったのか。すれ違う人と意図的に目を合わせたりましてや笑うなんてことはしなかった。さぞや相手を心地よくない気分させていたことだろう。それがわかって態度をあらためた。すれ違う人やドアを開けてくれた人と目を合わせてほほ笑む。相手もほほ笑んでいることに気がつく。道を渡れるようにと停車してくれた車にもほほ笑む。運転手が手をあげて笑っているのがわかる。自分の回りが居心地のよい空間になっていく。

わが苗字「布施」とは本来「分かち合う心」、他人の喜ぶことをすることが自らの喜びにつながることを学ぶ、の意。よく「布施」から連想される「お布施」は「布施」の本質ではないものの本にあつた。仏教には和顔悦色施(わがんえつしきせ)という、「無財の七施」(財がなくとも人に与えることのできる七つの慈しみ)のひとつがあるという。それは他人に笑顔を向けることだと知り、国や宗教とは関わりなく、人間の本质は同じであるという感を強くする。見知らぬ人にほほ笑んで、相手からも笑顔をもらう。地球上のすべての人がこのような気持ちで人と接することができたら、争いなどなくなるだろうに。

(4)

日本語を初めて学ぶ人たちのクラスで、世界地図を貼る。日本製のものだ。学習者たちが目を丸くする。いつも世界の中心だったはずの自国(英国)が左端に追いやられているではないか。「これが日本で使う地図なんですか?」「そうですよ。」「アメリカは東にあるんですか?」「えっ、違うんですか?」わざと驚いてみせる。教室内に不思議な空気が流れる。「今まで考えたこともなかった。こういう世界の見方があるということ。今、すごく視野が開けた。ありがとう。」一人の学習者が言う。他の学習者も笑顔でうなずいている。文句なく嬉しい。彼らの輝く目は、初めて私が英語に接したときの目と同じであるに違いない。自分の住んでいる世界とは違う世界がある、どんどんそれを見ていきたい、とわくわくするあの高揚感を目の前の人たちが思い出させてくれる。これが外国語を学ぶ喜びではないのか。

少し上のクラスのTさんと2週間ぶりに会う。旅行で日本に行っていてクラスを休んでいた人だ。前回は関東地方に行ったから今回は関西に行くこと楽しみにしていたTさんに感想を聞く。特に印象に残ったのは、金閣寺に行ったときに彼の前にいた日本人の男子生徒たち(おそらく修学旅行で来ていたのだろう)が口々に「すげえ」「すげえ」と言っていたことだと言って笑う。確かにそのセリフは授業では扱いませんね、と私も笑う。もともとよくできていたTさんだったが、日本から帰ってきて日本語に磨きがかかっているのがよくわかる。彼なりに日本語をいろいろ使ってみたそうだ。相手の言うことがわかったということ、自分の日本語が通じたということ、が自信になっているようだ。

そう、これもわかる。初めて英語のネイティブ・スピーカーに自分の英語が通じて返事をもらえたときの喜びは今でも忘れられない。
願わくば、私が教えた日本語学習者の人たちにはこの先もずっと日本語を勉強していつてもらいたい。英語が私の世界を変え、ライフワークとなったように。

(5)

2000年に行われたある調査によると、ロンドンで話されている言語の数は307ヶ国語。もう10年以上前の調査だから今はさらにその数が増えているに違いない。それほど多くの民族が集まっている都市である。現在一件の家を5人で借りて住んでいる（いわゆるハウスシェアだ）が、「イギリス人」がいない。中国人、ドイツ人、ラトビア人、そしてインド人に日本人。当然会話は英語で行われることになる。先日その中のドイツ人に誘われ、バッキンガム宮殿近くのタイ料理店で昼食をごちそうになったが、話題は個人的なことから政治、経済、自然災害、文化、芸能など多岐にわたり、料理の美味しさも手伝って大いに楽しめるひとときとなった。若い頃は、英語をネイティブ・スピーカーと話すことしか考えていなかったが、ここロンドンで生活しているとそれは非常に狭い考えであったことがよくわかる。英語を媒介として世界のどこから来た人とでも対話ができ、お互いを知り合える。私の十代の頃からの夢「国際平和」の実現、それが英語を学ぶ理由の一つだ。

私にこの力を与えてくれたのは茅ヶ崎方式英語会である。

今まで紹介させていただいたものも含め、英国での貴重な経験の数々は英語会と出会っていなければなかったといつてもいいものばかりである。行く先々で「内容のあるきちんとした英語を話す」と言っていたら、茅ヶ崎方式は本物であると言ってもらっているようで本当に嬉しくなる。ロンドンに来てから、英語会の教本で勉強しているという人に二名お目にかかった。たまたまわかったことであり、実はもっと多くの人がいるのではと思うと胸が高鳴る。対話するには語彙力、聴解力、文法力、そして話す内容についての背景知識が必要だが、英語会でそれらがいかに大事かということ、そしてそのすべての力をつける訓練ができた。もちろん、今の自分の英語力に満足などしていない。勉強はまだ続く。一生続くだろう。ライフワークと先に述べたのはそのためである。目の前の派手なものに惑わされず地道に続ける努力は身につけ花開くときがくると信じている。

約1年半続けさせていただいたが今回をもってJmailは終了となる。拙文を毎号読んで感想をくださった方々、原稿執筆にあたってお世話になった英語会関係者の方々、私を信じ励まし続けてくれた両親に心から感謝の意を表し、茅ヶ崎方式の益々の発展を心から願って筆を置くことにする。Wish you all the best!

(Book1 作成協力者 茅ヶ崎校元講師)



お知らせ

協力校通信 Chigasakimates を一時休刊します。

震災から1年が経ちました。震災の翌日、ロンドンの布施さんから THE INDEPENDENT 紙1面の日の丸に書かれた“がんばれ日本、がんばれ東北”の文字に感涙しました。布施さんからのメールは Chigasakimates 第54号に掲載しました。季刊誌でのお知らせでは遅かったと思います。そして、このようなニュースやお知らせはもっと迅速に発信できるようにするためにメディアを変更したいと思います。

また、協力校や学習会の情報は、内容を充実し、学習者向けとは切り離して、会報のような形でお届けできたらと考えております。

新 Chigasakimates の再刊にご期待ください。

茅ヶ崎方式英語会 代表 大美賀 廣芳